



文化庁委託事業

『令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業』

事業報告書

こんにちは、 共生社会

ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ



2023年を振り返る

「こんにちは、共生社会（ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ）」は、コンテンポラリーダンスを専門領域とするNPO法人DANCE BOXが、神戸・新長田という下町の商店街のビルの4階にある小さな劇場ArtTheater dB KOBEを拠点に、事業を実施しています。障がいの有無、経済状況や家庭環境、国籍やルーツなど、一人一人の＜差異＞を優劣という物差しではなく独自性ととらえ、幾重にも循環していける関係性を生み出すこと、そして同時代性・芸術性の高い作品の創造と、それらを楽しむ・体験できる環境をつくり、関わる人すべてが新たな視点や価値観を見出すことにより豊かな社会が形成されることをめざし、以下の7つを柱に2019年度にスタートしました。

1. 社会包摂/社会における社会的弱者に対する理解促進
2. 複合的な理解・知見をもつ人材養成
3. 障がい者等の鑑賞機会の拡充
4. 障がい者等の創造体験の機会・場の拡充
5. 障がいのある表現者の育成と、障がいの有無混在の創造活動・発表の場の拡充
6. 国内外のアーティスト・組織との協働
7. 情報保障の充実

この5年間の活動を経て、この7つの取り組みはずいぶん深まりました。

『やさしいコンテンポラリーダンスクラス/やさコンプラス』では、障がいの有無を問わず、参加者一人一人が、互いに影響しあいがら、いきいきとそこに存在し、表現を互いに受け止めあうことのできるやさしい時間が広がっています。今年度は、出張ワークショップや特別支援学校でのアウトリーチも積極的に行い、新しい出会いがたくさん生まれました。

2年目となるミックスエイブルのダンスカンパニー「Mi-Mi-Bi」の活動は、盲・ろうのメンバーとのコミュニケーションや、それぞれの身体状況や、時間の制約など、すべて誰かの思い通りにはいかないもどかしさの中で、それでもよい公演にしたいというメンバーやスタッフの粘り強さが作品を成長させました。

そして今年度は、『みんなのフェスティバル』や＜共生社会の今～パフォーマンスが繋ぐ、長田の共生暮らし～＞と題した公演では、表現する側にも観客・参加者の側にも、障がいをもつ人や様々なルーツや背景をもつ人も含めて多様な人がいるプログラムを実施しました。寛容性のある新長田のまちの人々と連携し、まちそのものが多様な魅力に満ちているごちゃまぜな豊かさを、このまちで暮らすけれどまだそのことに会ってなかった人にも、イベントをきっかけにこのまちを訪れる人にも体験していただくことができました。

劇場やこのようなプロジェクトの現場が、障がいを持つ人や、ルーツの異なる人、生きづらい人や小さな子どもたちにとっても、気楽に入りできる場所であり、表現に出会う場・表現できる場、そして一人一人にとっての安心できる居場所になれることを願います。

プロジェクトと一緒に進めてくださった皆様、参加して下さった皆様にも、心より御礼申し上げます。

「こんにちは、共生社会（ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ）」プロジェクト・チーフ あや文



過去の報告書はこちらから

CONTENTS

目次

みんなのフェスティバル2023

03 みんなのフェスティバル

やさしいコンテンポラリーダンス

05 やさしいコンテンポラリーダンスクラス

07 やさコンプラス・旅するクラス

ミックスエイブルダンスカンパニー Mi-Mi-Bi

09 『未だ見たことのない美しさ～神戸ver.～』

11 公演レビュー 文：竹田真理

13 オープン稽古・映像展開

協力公演

15 『WAGOMU de 偶然という奇遇』

『趙恵美 ハレとケのハザマで。。。舞い上がれ』

『HAPPY AFRICAN FESTIVAL』

アダム・ベンジャミン

16 特別ワークショップ

アウトリーチ

17 兵庫県立神戸聴覚特別支援学校

神戸市立いぶき明生支援学校

神戸市立青陽灘高等支援学校

5年間を振り返る

18 トークディスカッション

「こんにちは、共生社会」の5年間を振り返る

～障がいを持つ人との取り組みを中心に～」

情報保障/ウェブサイト・SNS

21 情報保障/ウェブサイト・SNS

2023年を通して

22 運営メンバーの声

みんなのフェスティバル2023

大人も子どもも知らなかった
まちのカタチや人やコトに出会う、
ローカル・フェスティバル in 新長田



長田に暮らす人や活動拠点を置く人・場・プロジェクトをフェスティバルのパートナーとして協働し、神戸/長田のまちで、ローカルなフェスティバルを行いました。それぞれが主体的にアイデアを練り準備し、場とコトをつなぐまちびらきのスタイルで開催しました。会場は、商店街に面したコミュニティスペースや、高齢者施設、漁港の倉庫、アトリエ、公園、今は使用されていない歴史的建造物の保育所跡など、パブリックな場所もプライベートな場所も様々。内容は、住みびらき、展示、お店、ダンスパフォーマンス、縁日、ワークショップ、座談会など様々。

日程：2023年7月22日(土)

新長田まちびらき～真陽・駒ヶ林の路地裏へ行ってみよう！～

2023年7月23日(日)

dB界隈びらき～劇場・ダンスボックスにも行ってみよう！～

会場/フェスティバルパートナー：

はっぴーの家ろっけん、カフェバーサカツキ、下町ゲストハウス とまりぎ、うみべのなかよし広場、旧駒ヶ林保育所、駒ヶ林漁港横倉庫、アトリエKOMA、大正筋商店街、フィジオデザイン、くにつかコミュニティハウス、くにつかカルチャーラボ、ArtTheater dB KOBE、六間道三丁目商店街、r3

共催：アッセン駒ヶ林、各フェスティバルパートナー

写真：岩本順平 ロゴ：升田学

7/22プログラム：

はっぴーのすみびらき&喫茶探偵団追悼『喫茶展』@はっぴーの家ろっけん、路地裏asobi基地@カフェバーサカツキの前の路地、武内美津子作品展@下町ゲストハウス とまりぎ、松縄春香「みんなのアトリエ～夏の光を描こう!～」@うみべのなかよし広場、下町青空ダンス倶楽部 ダンス公演『美しき水脈』@旧駒ヶ林保育所、アッセン駒ヶ林「みんなのニット」@駒ヶ林漁港横倉庫、トーク「研究者と語る!みんなのローカルフェスティバル～子育て・教育・まちづくりの視点から～」@駒ヶ林漁港横倉庫、小松菜々子「納得のプラクティス-トキトキ交換-」@ウエノくんコーヒー「マブチさんの何でもペインティング」@ヨーコの絵本朗読会@アトリエKOMA、大正筋縁日@大正筋商店街、コミュニティスペース@フィジオデザイン、おもちゃすくい・ガシャポン@くにつかコミュニティハウス、Dance Box Resident Program 2023 DANCE BOX×Links Hall 滞在制作 J'Sun Howard 作品 ワークインプログレス@ArtTheater dB KOBE、ユニバーサル多国籍ミュージックナイト 出張BAR:池田浩基 (BAR SAKAZUKI) @ArtTheater dB KOBE

7/23プログラム：

青空の下で、やさしいコンテンポラリーダンスクラス@若松公園、くにつかラボ体験会 withワークショップ(ミニゲームもあるよ!)@くにつかカルチャーラボ、子ども大人も親子も障がいのある人も!!!みんな集まれ「ごちゃ混ぜ劇場」@ArtTheater dB KOBE、とまらんあつし「MAN☆DOKU」@新長田界隈、ワールドサマーフェスタin 真陽@六間道三丁目商店街、下町マルシェ@r3





コラム

合同会社こどもみらい探求社 共同代表 小笠原舞さん

福祉を学んでいた私にとって、DANCE BOXがいつも行なっているコンテンツは移住したいと思った1つの要素でした。素晴らしいと思ったと同時に、もっと親子に参加してほしいと思って数年。念願叶って、今回のみんなのフェスティバルで「教育」という言葉を入れ、親子で参加しやすいコンテンツ・動線を企画させて頂きました。学校ではなく街の中だからこそ、多様な世代・人種が混じり合い、アートがあるから差を超えられる。これからもそんな機会を多くの親子に届けられるように関わっていきたいと思っています。

参加者の声

- 最初表現するときは、何か正解があり、それを表現しなきゃ!と思ってしまい、緊張もしたし、分からないなぁと焦りました。でも、他の人の表現を見ているうちに、ああ正解はないんだ、思ったまま、感じたままに自由に表現すればいいんだ、とわかり、とても気持ちが楽になり、楽しくなりました。
- 新しい身体感覚を体験したと感じた。自分の身体が拡張していくような感覚があった。
- はじめましての方とこんなに楽しい時間を過ごせて嬉しかったです。
- 参加してよかったです。劇場がまちにあるすばらしさに励まされました。
- 感覚をフルに使ってみたい、もっと使えそうだと思いました。もっと探求したいと思いました。
- 子どもたちの伸び伸びした姿、色々な人との繋がりを見て、成長してるんだと涙ポロポロでした。この時間、少しの間でも無になれて、妻として母としての肩書きを忘れられたのが、とてもリフレッシュになりました!



やさしいコンテンポラリーダンスクラス

踊ってみたい方はどなたでも♪

やさしいコンテンポラリーダンスクラス

月に一度のペースで開催している、踊ってみたい方はどなたでもウェルカムなダンスのクラス『やさしいコンテンポラリーダンスクラス』。通称『やさコン』。継続して参加する人が、はじめて参加する人を迎え入れる場面も度々垣間見ることができ、継続することで生まれたコミュニケーションも発見できました。クラスの内容は、「このように踊りましょう」といった決まった踊り方はなく、シンプルなルールを使って、からだや場所、人と出会いながら、それぞれの踊り方をさがしていきます。子どもと親、介助する人と介助される人など、普段の関係性や肩書きを外し、それぞれのペースでダンスを楽しみました。

日程：2023年4月23日(日)、5月21日(日)、6月18日(日)、*7月23日(日)、8月5日(土)、9月10日(日)、10月8日(日)、11月12日(日)、12月3日(日)、2024年1月14日(日)、2月4日(日)、3月17日(日)

時間：10:30～12:00

会場：ArtTheater dB KOBE

対象：踊ってみたい方はどなたでも。踊ったことのない方も大歓迎。障がいのある方も大歓迎。ベビーカーなどのお子さんづれも。

参加費：無料(カンパ制)

ナビゲーター：西岡樹里

*7/23は「みんなのフェスティバル2023」のプログラムとして、青空の下、若松公園にて開催しました。

参加者の声

- ゆったりと自分の体と向き合える時間。
- みんなと触れ合う時間。
- ダンスを踊る時間はたのしいです。またダンスをしたいと思います。
- 自由で隔たらない。色んな人がいて安心する。
- 普段は行かない動き、運動、人との関係性を認知できる時間。
- 初参加なのに、自然と受け入れてもらえて嬉しかったです。
- 人の素敵などところを見る時間。





やさしいコンテンポラリーダンスクラス

発表をめざすクラス

やさコン+(プラス)

今年度からスタートした新クラス『やさコン+』。「障がいがある人もない人も、ダンスのおもしろさを知っている人、集まれ!」の声かけにより集まった参加者と、やさコンクラスよりも少しじっくり、少しがんばって、ダンスに向き合う時間をつくり、発表を目指しました。自分のダンスをつくってみたり、振付を踊ってみたり、発表に向けて練習したり。今年度は『みんなのフェスティバル』と、『障がい者に就労と学びの機会を!研究会』にて発表を行いました。

日程: 2023年5月28日(日)、6月2日(日)、6月25日(日)、7月9日(日)、7月16日(日)、8月5日(日)

会場: ArtTheater dB KOBE

発表①日程: 2023年7月23日(日) **会場:** ArtTheater dB KOBE
『みんなのフェスティバル』のプログラムのひとつとして発表しました。

発表②日程: 2023年8月18日(金) **会場:** 神戸飯店
『障がい者に就労と学びの機会を!研究会』のゲスト・パフォーマンスとして発表しました。

対象: 小学3年生以上

参加費: 500円以上のカンパ制

ナビゲーター: 西岡樹里



「自由」この一言につきます。始まりは自己紹介。「りかと言います。りかさんと呼んでください」と言うと、常連の参加者の「せーの」の掛け声と共にみんなが「りかさーん」と呼んでくれます。嬉しくなって最高のパフォーマンスで「はい」と返事。この一瞬で参加者全員の心がふわっと繋がります。その後は、みんなで歩いたり止まったり、真似をしたり、指や体で絵を描いたり、風船やティッシュを運んだり飛ばしたり、、、最初は恥ずかしそうにしていた人も、体が上手く動かせなかった人も、どんどん笑顔になって、どんどん自由になっていく。年齢も性別も障害も何も関係なく、自分が自分でいられて、本当の仲間に囲まれる場所。それが『やさしいコンテンポラリーダンス』。「やさしい」は「易し」くて「優しい」のです。

出張版やさコン

旅するクラス

いつもの劇場を飛び出して、踊ってみたい方がいらっしゃる場所へナビゲーターの西岡樹里さんが出張し、ダンス体験をお届けしました。障がいのある人もない人も、1歳の子どもから大人まで、その日その場で出会う人たちと、場所や環境などがつくる雰囲気も大切にしながら、過ごしました。

日程: 2023年10月14日(土)

会場: あまねくあまなつハウス(神戸市垂水区)

主催: ネキネキ

日程: 2024年2月11日(日)

会場: 市民交流プラザふくちやま

記録写真: 田中梨乃

主催: 一般社団法人福知山芸術文化振興会 **制作:** 株式会社Locatell



対象を年齢や性別、そして障害の有無を問わずに行うダンスワークショップは当法人では初めての開催でした。これまでは交流のなかった支援学校にもお声がけし、1歳~56歳まで20名の方々が参加。幅広い年齢の方と触れ合いながら、自分の身体をつかってのびのびと表現ができる、大変豊かな時間になりました。また、講師としてお越しくださった西岡樹里さんと、アシスタントの文さんのコミュニケーションがとても素晴らしく、最初から最後まで本当に良い雰囲気でした。

2023年を振り返って



コラム

やさしいコンテンポラリーダンスクラスナビゲーター西岡樹里さん

『やさしいコンテンポラリーダンスクラス』は、今年度で4年目を迎えました。クラス開始から、年齢や障害の有無に関わらず「踊ってみたい人」が参加できる踊りの場として開き、今年度も多くの人とここで出会うことができました。

レギュラーメンバーはもちろん、車椅子ユーザーの人やヘルパーを利用し参加してくれた人、小さなお子さんやご家族、ご夫婦、初めてダンスクラスに来る人、ダンスに親しんでいる人。個々に異なる「からだ」を持ち寄って過ごしています。出会えた人と一緒に踊る為にからだを動かして工夫することで、踊りの楽しさや手強さの両方を体験する時間となっています。

この他に、劇場から飛び出し公園で踊る『青空の下で、やさしいコンテンポラリーダンスクラス』、有志によるステージ発表会『やさコンブラス』、支援学校へのアウトリーチ、神戸や京都への出張ワークショップなどを実施。

出張ワークショップでは、お子さんが支援学校に通うお母さんから「子どもが気軽に参加できて、元気に踊ったり活動できる場所があればいいなと思っていたので、参加できてよかった。」とお話を聞く機会がありました。

人が集まることでつくられる時間と場が、ここでは日常のちょっとした隙間のように感じます。その隙間でひとつひとつの異なる「からだ」に改めて目を向け、自分や誰かへの正しさの視線を緩めてみるところから、ひとりひとりの「踊り」が垣間見えたように思います。出来たことも、出来なかったことも沢山ありましたが、今後の課題として繋げていきたいと思っています。



写真：田中梨乃



写真：田中梨乃



ミックスエイブルダンスカンパニーMi-Mi-Bi

『未だ見たことのない美しさ～神戸ver.～』

2022年、豊岡演劇祭フリンジセレクションにて鮮烈なデビューを果たした、ダンスカンパニーMi-Mi-Bi（みみび）。この度は、新しいメンバーを迎え、Mi-Mi-Biの拠点でもある神戸・新長田の劇場ArtTheater dB KOBEにて3日間の凱旋公演を行いました。見えない人、聞こえない人、義足、車椅子ユーザー等の身体に障がいのある人、目に見えない障がいのある人、典型的な身体を持つパフォーマーなど、異なりの振幅大きな身体と感覚が迫りくると話題になりました。それぞれの身体や感覚を共有しながらの創作。踊るためには、ここに存在するには、どうあるべきかを問いながら、それぞれが見つめ合う時間でした。

日時：2023年10月26日(木)19:00、10月27日(金)18:00、10月28日(土)15:00

※10/27 出演者によるアフタートーク開催(手話通訳付)

※10/28 14時～見えない人のための鑑賞ガイド開催

会場：ArtTheater dB KOBE

演出：森田かずよ **演出補佐：**内田結花

振付・出演：内田結花、KAZUKI、武内美津子、福角宣弘、三田宏美、も、森田かずよ

振付・映像出演：福角幸子

音楽：日野浩志郎 **舞台衣装：**bde

協働メンバー：竹口郁美、中村風太

手話通訳：三田宏美、箕浦伸子

舞台監督：夏目雅也 **舞台補佐：**福田有司

照明デザイン：三浦あさ子 **照明：**青山愛、森田智子、茂木紀恵

音響：西川文章 **写真：**岩本順平

スタッフ：大谷燦、文、横堀ふみ、田中幸恵、新家綾、内田結花、野田容瑛、眞鍋隼介、杉本昇太、池本由樹菜、鈴木優、Nathalie Schreiter (インターン)

撮影協力：医療法人社団十善会 野瀬病院

初演：豊岡演劇祭2022フリンジセレクション作品『未だ見たことのない美しさ～豊岡ver.～』

掲載情報：

神戸新聞「障がいのあるダンサーら特徴生かして表現 神戸拠点の「Mi-Mi-Bi」26日から長田で公演」(2023.10.20掲載)

ラジオ関西トビックス ラジトビ「身体の違い、感覚の違いを五感で感じるダンス公演 神戸・新長田で10月26日から」(2023.10.26掲載)

ラジオ関西「平田オリザの舞台は但馬」ゲスト出演 (2023.10.26放送)





コラム

「不在だけど、そこに存在することの意味」森田かずよ

2022年豊岡演劇祭での公演内容を再演するという形ではあったが、会場が変わると何もかもが変化し、一からクリエイションをするような感覚だった。そして本番2週間前に起こった福角幸子さんの体調不良による出演見合わせ。最終的には映像での出演となった幸子さんの不在を受け止めつつも、どのように存在させるかを問い、カンパニー全員で答えを出せたことは大きな一歩だったように思う。幸子さんが纏う空気、声。姿はそこになくとも、そこに存在し続けるあり方。感傷的なことではなく、同じ場を形成する存在として居続けて欲しかった。これからも既存にとらわれない形で、私たちなりのやり方を見つけていく。その旅を続けていく。

観客の声

- 既存の美意識がくずれ、新たな意識が生まれる。
- 映像で一度拝見していましたが、劇場で真近に見ると、息づかいを感じ
- 圧巻でした。まさに見たことのない美しさ。
- 小さな男の子がはじめからおわりまで、イスの背もたれにももたれず、舞台にくぎづけな姿にとても心をうたれました。
- 今の現況でできないと思う自分自身の心にある限界をとっばらっていた
- いただきました。
- 舞台に立っている出演者の皆さんの姿を見て、わたし自身の出来る／出来ないなどがぎとられて、同じ土俵に立つことができた気がしました。
- 今までのあたりまえを改めて問う時間になりました。



ミックスエイブルダンスカンパニーMi-Mi-Bi



公演レビュー

「異なる身体が発する豊穣なノイズに耳を澄ます」 竹田真理

ミックスエイブルダンスカンパニー「Mi-Mi-Bi」は2022年2月にArtTheater dB KOBEで開催されたトライアル・ダンス公演『未見美(Mi-Mi-Bi)』をもとに、出演したダンサーやパフォーマーから結成されたカンパニーである。「ミックスエイブル」とは、当カンパニーが障害のある人のみならず、障害のない人、その境界にある人も含めたメンバーで構成され、かつそれぞれの感性や個性、特性が障害の有無を越えて混じり合うさまに由来する。旗揚げ公演は2022年9月、豊岡演劇祭2022フリンジセレクションへの参加であった。今回の神戸ヴァージョンはカンパニーの拠点劇場における凱旋公演となる。ステージの横幅など豊岡公演とは条件が異なった分、演出に工夫を要したといい、例えば車椅子で上り下りできるスロープの位置を変更し、ステージ前面の縁の外側に付ける設営とした。視覚障害のある人、車椅子の人、義足を使用する人にとって、少しの空間の違いが演技に大きく影響することは想像に難くない。ただ、スロープを通してステージに入るダンサーたちの姿を客席から横向きに眺める設定にしたことで、本作のテーマ「旅」のイメージ、すなわち「遠い場所からやってきてどこかへ去っていく旅人たち」の姿が一つの「絵」として映る効果を生み、異なる身体をもった7人の集団が旅するキャラバンのイメージに重なるのだった。地上に生まれた限り、人は一人一つの身体をもって人生の旅をするが、その身体は唯一無二の、その人だけのユニークな身体であり、人が抽象的な存在でない限り、その代えがたい身体をもって世界と具体的に関わっている。そうした意味で多様かつ対等である7人は、それぞれの異なる負荷を抱えて互いの身体と関わり合い、そのつど生じる関係性のバランスを生きている。そこに予定調和の理解や受容はなく、毎回のリハーサルが身を賭して渡り合う真剣な話し合いの過程であったという。出演予定だった福角幸子さんは体調不良のため映像出演となった。作品はインタビューに答える幸子さんの映像で始まる。コンテンポラリーダンスと出会い、自分の震える手や身体が武器になるのだと知ったと言い、自身の身体を100パーセント受け入れているわけでないが、「これが私であり、他の人にはない、私にしかできないダンスがある気がして」と語る言葉は、そのまま本作のテーマに通じるプロローグだった。

視覚に障害をもつ武内美津子さんがスロープを登って少しずつ歩を進め舞台に入る。心の声を映す言葉が文字列となってホリズントに投射される——「こわい」「どこ？」(パソコン操作:中村風太)。点滅するカーソルが心の動きを、臨場感をもって伝え、声に呼応するようにメンバーたちが一人ひとり現れてひと固まりの集合体をつくる。固まりは接触を保ったままアメーバ状に変容しながら舞台を移動してゆく。美津子さんの白い杖が手か

竹田真理(たけだ・まり)

ダンス批評。関西を拠点に活動しコンテンポラリーダンスを中心に取材・執筆を重ねている。ら手へと受け渡され、負荷を分有し、新たな表現を拓く可能性が示唆される。照明の効果で一人一人のカラフルな衣裳が映え、自由へと向かう旅のイメージと祝祭の色を濃くする。作品は(手元のメモを見る限り)18のシーンで構成されており、ソロ、デュオ、群舞が連なっている。シーンとシーンの繋ぎでは誰かが去り、誰かが残り、そこに別の誰かが現れ、そのたびに新たな関わり方が模索される。連なるシーンの数々は多彩で創造性に富み、障害をもつ身体による達成といった意義にとどまらない価値を追求していて、アーティストックな面でも高いレベルを示す舞台となっている。

すでに舞台経験を積んできたパフォーマーたちのソロは各人が活動の中でどのような思索を深めてきたのかを垣間見せる。車椅子をアクロバティックに操作する福角宣弘さんのシーンでは、空っぽの車椅子が舞台を静かに滑って彼のそばに来る。身体の拡張である道具との物理的な関係、かつ分かちがたい相棒のような関係性が見て取れる。物語や心情を雄弁に語る自らの手話が言葉であり記号であることの枠を脱し、言葉を超えた表現の豊かさへ踏み出そうとするKAZUKIさん。

ガムランの音に応じるように腕を空中に泳がせ、義足とともに踊りながら音、空間、重力との対話により自身の身体で何が踊れるのかを探索する森田かずよさん。

出演が叶わなかった福角幸子さんは先述のトライアル・ダンス公演「未見美(Mi-Mi-Bi)」で発表した『My Body』(*)の豊岡演劇祭における上演の音声録音の再生による「参加」となった。不随意の身体から発される声は生のパフォーマンスに劣るものではなく、自らの存在の証を問う切なる叫びとして、観客一人一人の胸に届き、深い残響となって刻まれた。

それぞれの代え難い表現となったソロ・パフォーマンスの一方で、デュオや7人による群舞ではカンパニーならではの表現が模索されている。演出の森田かずよさんが本作では特にコミュニケーションのあり方を探たと語るように、さまざまな顔合わせで踊られるデュオは思いもよらない関わりや表情を見せ、我々の固定化した思考を揺さぶってくる。

舞台と客席に分かれたKAZUKIさんと三田宏美さんは、離れた位置から大きな身振りを交わす。手話の使い手と通訳者である二人だが、観客の多くにはそれが手話であるか振付であるかの区別がつかない。相手の動きを鏡のように真似る応答、違う動きが示された時の警戒感、語りかけるように身振り手振りを重ね、舞台上で背中を合わせ、徐々に信頼を築いていくプロセスが繊細な感情とともに表現される。空間に美しく映える腕の動

き、人類が最初に交わしたコミュニケーションは相手の動きを真似ることだったかと思わせる説得力、他者と通じ合うことの幸福が手話と振付、言語とダンスの境界に立ちのぼり、コミュニケーションの本質に触れ得た忘れ難いシーンとなった。

床に横たわる内田結花さんに宣弘さんが車椅子で近づき、その手をとって引き起こす。二人は向かい合い、内田さんの肩に宣弘さんが両腕を回す。内田さんが立ち上がると宣弘さんを抱え上げる格好となり、そのまま二人で舞台手前まで出てくる。宣弘さんを床に下ろし、二人は床をごろりとローリングする。意味に還元できない非言語的な関わりは夢の中の光景のように鮮やかだ。しかしそこには身体障害者と健常者、プロフェッショナルなダンサーとそうでない者、年長者と若年者、男性と女性、介助する者とされる者といった複数の差異が交差しており、権力勾配や官能への微かな予感が観る者をざわめかせる。と同時に、差異を越えた交感の可能性を感じさせもする。

女性のみで構成されたシーンでは障害に加えてジェンダーの視点を引き入れ、ここでも交差的な差異を含んだ関係性を見つめている。本番の出演が叶わなかった福角幸子さんに代わり、「も」さんが出演したが、男性が異質な一人として加わったことで、ジェンダー・アイデンティティへの複層的な視点は明確になった。ホリゾントの前に並んだ5人の彼・彼女らは目を閉じて（見えない美津子さんの感覚を体験するためだろう）同一の振付を動くが、少しずつ速度やタイミングがずらされ、徐々に舞台に散開しながらさまざまなノイズを発し始める。床に頬杖をつく人、額と額を密着させて向き合う二人、舞台を滑ってくる車椅子、それを背中に乗せて立ち上がる人。舞台上の思いがけない光景の数々は不思議な夢か記憶の底から掬い上げた風景のようである。タンツ・テアター（**）と呼びたいそれらのシーンは言葉では言いようのない感覚や感情、記憶やイメージを複雑さのままに湛えていて、文脈は不明ではあれ、紛れもなく身体が生み出す想像力の産物である。それらは自由な発想からというよりむしろ制限のある身体、異なる負荷を負った身体の可能性を探ることから生まれている。差異を埋めて均（なら）すのではなく、差異をそのままに、「ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ」（***）なノイズに耳を澄ますことで成り立つ世界の像である。

後半の群舞で、ホリゾントに「あるく」「ふれる」などの動詞が投影され、いわば字幕による振付がなされるが、応じるダンサーたちの動きはもはや言うまでもないが一樣ではない。「とける」に応じてゆらゆらと柔らかく靡（なび）く人、「ひかる」に応じて自ら光を発するイメージを醸す身体。やがて「おどる」を繰り返す文字列とともにそれぞれの自由な動きがノイズをたっぷりと湛えながら、喜びとともに発露する様は美しかった。アフタートークで述べられたように、何度稽古を重ねても異なる障害をもつ人たち

の間で「相手が何を分らないのかが分らない」状況から出発し、毎回ゼロから生き直すようなプロセスをメンバーたちは生きている。予定調和も着地点もない「Mi-Mi-Bi」の旅はそれゆえにスリリングで、舞台は多様でどこを切り取っても豊穡なノイズに満ちている。未だかつて試みられたことのない、障害をもつ人（と持たない人や境界にある人）たちによる、有無をこえて人・もの・ことが多様に混じり合うダンスカンパニーの行く末を見届ける旅を私たちも続けたい。

*パフォーマンスの詳細は<https://diversity.db-dancebox.org/303/>を参照

*ピナ・バウシュに代表される演劇的手法を取り入れたダンス。演劇とダンスの間にある舞台芸術の一形態。

***DANCE BOXが主催する「こんにちは、共生社会」のテーマ。本公演はこのプロジェクトの一演目として実施されている。



ミックスエイブルダンスカンパニーMi-Mi-Bi

Mi-Mi-Bi「オープン稽古」

それぞれに異なる身体性や感覚に、より自覚的になり、他者とのようにすれば自身の身体感覚を共有できるのか、その方法を探すための稽古の時間。外部からの参加者も募り、オープンな状態で、カンパニーの稽古方法を探しました。「なにをやる？」と手探りの話し合いながら始まり、参加者の新しい風が混ざり合いながら、自分の身体に集中する時間があったり、この場にいる誰かと取り組む時間があったりetc…実践を積み重ねる時間となりました。今年度は2度、ゲスト講師を招き、小松菜々子さんにはフロアトレーニングを教えていただき、目黒大路さんは言葉からソロダンスをつくる体験を提供くださいました。

日程：2023年*4月21日(金)、5月8日(月)、6月4日(日)、12月28日(月)、2024年1月29日(月)、2月6日(火)、*3月4日(月)、3月18日(月)

時間：14:00～17:00 参加費：無料

ゲスト講師：*4/21 小松菜々子、*3/4 目黒大路

対象者：障がいのある方もない方も。Mi-Mi-Biカンパニーの活動に興味があり、アーティストやパフォーマーを志すひとりとして共に稽古したいという方。

※手話通訳有・事前申込制



STAGE BEYOND BORDERS

Mi-Mi-Biドキュメンタリー

『あたらしい言葉』



日本の舞台公演をオンラインで世界に届ける「STAGE BEYOND BORDERS」にて、Mi-Mi-Biの旗あげ公演(2022年、豊岡にて)のメイキング+公演本番を記録・編集した映像ドキュメンタリー『あたらしい言葉』が、6言語の字幕付きで配信されています。

視聴URL: <https://stagebb.jp/go.jp/stage/a-documentary-by-mi-mi-bi-new-words/>

視聴期限: 2027年1月18日(月) 料金: 無料

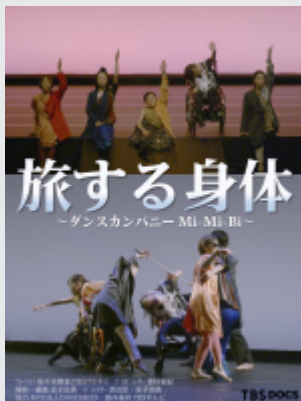
字幕: 日本語・中国語(簡体/繁体)・英語・フランス語・スペイン語

製作(オンライン配信): 国際交流基金(JF) 製作協力: 一般社団法人EPAD



TBSテレビドキュメンタリー解放区

『旅する身体～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～』



2022年豊岡演劇祭フリンジセレクションにて上演したMi-Mi-Bi『未だ見たことのない美しさ～豊岡ver.～』のクリエイション過程を追ったドキュメント映像が、TBSのドキュメンタリー番組「解放区」で放映されました。

放送日時(TBS):
2023年11月19日(日)24:58～25:58

放送日時(MBS):
2023年12月17日(日)5:00～6:00

協力: NPO法人DANCE BOX
製作著作: TBSテレビ



TBSドキュメンタリー映画祭2024

『旅する身体～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～』

テレビやSNSでは伝えきれない事実や声なき心の声を発信し続ける本気のドキュメンタリー作品に出会える場として、2021年より開催されてきた「TBSドキュメンタリー映画祭」。テレビ放映されたドキュメンタリー映像を再編集し、映画『旅する身体～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～』(監督: 渡辺匠、志子田勇)として選出され、全国6都市の映画館にて上映されました。

開催期間: 2024年3月15日(日)～4月11日(木)

会場: ヒューマントラストシネマ渋谷(東京)、シネ・リーブル梅田(大阪)、UPLINK京都(京都)、センチュリーシネマ(愛知)、キノシネマ天神(福岡)、シアターキノ(北海道)
※バリアフリー上映回もあり(日本語字幕・副音声付)

製作著作: TBSテレビ 制作協力: MOM&DAVID 協力: NPO法人DANCE BOX

協力公演

共生社会の今～パフォーマンスが繋ぐ、長田的共生暮らし～

<ダンス>からだ×おと<音楽>

『WAGOMU de 偶然という奇遇』

日程:2023年8月5日(土) 時間:15:00～体験の部、19:00～ライブの部

会場:WAGOMUクライミングジム 料金:入場無料(投げ銭制)

出演:偶然という奇遇(伊藤千枝子、中ムラサトコ)、前座とまらんあつし「MAN☆DOKU」(漫読)

共催:株式会社Happy OUTDOOR LAB事業部

ダンサー・伊藤千枝子(a.k.a.珍しいキノコ舞踏団)×声の魔術師・中ムラサトコの即興パフォーマンスユニット「偶然という奇遇」が、就労支援B型事業所のWAGOMUクライミングジムにて、来場者ひとりひとりにお題を頂きながら、即興の歌と踊りを捧げました。始終笑顔の絶えないダンスと音楽の時間を、その場に集まった人々と、楽しみ喜ぶ時間になりました。



趙恵美 単独ソロ公演ダンス

『ハレとケのハザマで。。。舞い上がれ』

日時:2023年8月14日(月)14:30～/18:30～ 会場:ArtTheater dB KOBE

振付・演出・出演:趙恵美 衣装:大野知英 音楽:KEYWON 映像:池田浩基 美術:浅山美由紀

舞台監督:小林勇陽 照明:三浦あさ子 音響:西川文章 チラシデザイン:阪下湊成 記録写真:岩本順平

主催:趙恵美 舞の旅プロジェクト 助成:芸術文化に親しむひょうご推進事業

協力:スタジオ・長田教坊、遊合芸能チングドゥル、SAKAZUKI Production、NPO法人DANCE BOX、city gallery2320

神戸・長田を拠点に、朝鮮舞踊と韓国舞踊に軸を置き創作活動を行う、コリアンダンサーの趙恵美さんによる単独ソロ公演。本公演では、国籍を外した本当の自分を追求し、舞を通して、あるがままの自分の表現を探索されました。映像に映し出された日常「ケ」と舞台という非日常「ハレ」を行き来し、そのハザマで舞いました。



HAPPY AFRICAN FESTIVAL 2023-融合 fusion-

日時:2023年11月19日(日)12:00～/16:00～ 会場:ArtTheater dB KOBE

総監督:Alain Sinandja 出演:ギンガンゴン、バランゴマ、太鼓楽団 大地の会、ドゥニドゥニ、遊合芸能チングドゥル

舞台監督:下村唯 照明:三浦あさ子 音響:和田真也 フライヤーデザイン:中元俊介 記録写真:阪下湊成

制作:前田彰 運営:北孝之、橋元恵風、秋田乃梨子、松縄春香、藤田澄恵、五十嵐香里

主催:Arts For All 協力:NPO法人DANCE BOX、はっぴーの家ろっけん、r3、スタジオ・長田教坊、カフェ&バーSAKAZUKI、DoniDoni、Yendoupabe

兵庫県神戸市長田区にて性別や年齢、障がいの有無や国籍を問わず楽しむ「ハッピーアフリカンフェスティバル」。今年のテーマは“Fusion 融合”。下町の人情が残る長田区とアフリカを繋げたい。国や文化や価値観、性別や年齢、障がいの有無。様々な垣根を飛び越えて、老若男女が笑って踊るピースフルな時間になりました。



■ アダム・ベンジャミン ワークショップ

イギリスにて、身体障がいのある舞踊家達とない舞踊家達で構成されるダンスカンパニーCandoCoを設立し、共同芸術監督も務めたアダム・ベンジャミンによる特別ワークショップを開催しました。身体に障がいのある方の動きの特性、また、車椅子の動きの特性も生かしながら振付をしていくベンジャミン氏独特のコンテンポラリーダンスの技法のレクチャーや、身体に障がいのある方とない方がお互いの身体表現の特徴を活かし合いながら共に踊る方法を学びました。2日目は障がいのある方とかかわるナビゲーター向けのワークショップとして実施、3日目はMi-Mi-Biカンパニーメンバーを対象に実施しました。

①ワークショップ for ALL

日時：2023年12月10日（日）15:00～17:00

参加費：一般の方・アーティスト 2,000円／障がいのある人 1,000円

②ナビゲーター育成ワークショップ

日時：2023年12月11日（月）10:30～16:30

参加費：一般の方 4,000円／アーティスト 2,500円／障がいのある人 1,500円

※①②通し受講割引：一般 5,500円／アーティスト 4,000円／障がいのある人 2,000円

③特別ワークショップ for Mi-Mi-Bi

日時：2023年12月12日（火）10:30～16:30

※③はMi-Mi-Biカンパニーメンバーを対象に開催

会場：ArtTheater dB KOBE 講師：アダム・ベンジャミン

対象：障がいのある方もない方も。障がいのある方とかかわるナビゲーター、教育関係者、等



アダム・ベンジャミンさんのワークショップは、多様な体の機能性について配慮しつつ、同時にそれは方便なのだな、ということがわかってくるようなものでした。能動態以外の態を引き出すためのアイデアに満ちたワークの数々を、いろいろな人たちと取り組みながら、体と体との間に横たわる空間や、体と体との間を流れる時間こそが、多様な体の持ち主たちと共有できる芸術的な資源なのだと気づけたことは大きかったです。



アウトリーチ

兵庫県立神戸聴覚特別支援学校

前半は、会話ではなく、身体から感じられる非言語コミュニケーションをダンスを通して体験し、後半は学年ごとにグループになってショートピースのパフォーマンスをつくって発表しました。先生方も生徒たちともに動いてくださり、体育館に集まった人がひとつになって、ダンスを楽しむ時間になりました。

日程：2023年10月4日（水）

対象：小学部1～6年生（18名）

ナビゲーター：Mi-Mi-Bi（内田結花、三田宏美、も、文）

手話通訳：三田宏美



神戸市立いぶき明生支援学校

テーマは「ダンスを介した出会いの体験」。正解や間違いのない、個々の身体を元にした身体表現に出会う場をつくりました。大井さんの奏でる楽器の音色が響くなか、ダンスによる非言語のコミュニケーションを通して、誰かと誰かの関わりによって生まれた動きや身体を楽しむ時間になりました。

日時：2024年1月22日（月）①9:30②10:40③13:10

対象：中学部 156名（3年生（56名）、2年生（56名）、1年生（44名））

ナビゲーター：西岡樹里 音楽：大井卓也

アシスタント：高野裕子、山本沙織、吉川史浩、内田結花、新家綾、鈴木優、杉本昇太、田中幸恵、文



神戸市立青陽灘高等支援学校

ダンスを通して普段の活動では見られない姿を見せる人や、誰かの素敵な動きを発見し自分で動いて試してみる人、時々見学したり休憩したりしながら参加する人など、一人一人の個性に合った関わり方で体験できる時間になりました。ペアになって動く時間は、その人同士だから見つかる動きを探しました。個々の体を元にした多彩な表現をいくつも見ることができました。

日時：2024年3月12日（火）13:10～14:35

対象：高等部1～2年生（82名）

ナビゲーター：西岡樹里

アシスタント：高野裕子、川勝俊輔、近藤沙奈、後藤早純、下出倅妃、内田結花、新家綾、杉本昇太、田中幸恵、文



5年間を振り返る

トークディスカッション

「こんにちは、共生社会」の5年間を振り返る ～障がいを持つ人との取り組みを中心に～

今年度で5年目を迎えた「こんにちは、共生社会」プロジェクトでは、新長田を拠点に、年間を通じて数多くのプログラムを実施してきました。前半は、多岐にわたるプログラムの中でも、障がいを持つ人との取り組みを中心にこれまでの活動を一挙に振り返り、この5年間で生まれたこと・困難だったこと・広がったこと・技術になったこと等を洗い出してみました。後半には、九州大学の長津結一郎氏をゲストに迎え、この取り組みが社会にとってどのような価値があったのか、そして次代の共生社会をつくる更なる手がかりを、プロジェクトメンバー、そして参加者と共に考えました。

日時：2024年1月26日（金）13:30～16:30 会場：ArtTheater dB KOBE

進行：文（「こんにちは、共生社会（ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ）」プロジェクト・チーフ）

トーク登壇（プロジェクト・メンバー）：

西岡樹里 | ダンサー。踊ってみたい方はどなたでもウェルカムな『やさしいコンテンプラリーダンスクラス』のナビゲーターとして、立ち上げから関わる。

森田かずよ | 義足のダンサー／俳優。身体に障がいのある人もない人もごちゃ混ぜのダンスカンパニーMi-Mi-Biの発起人。豊岡公演（2022年）、神戸公演（2023年）では演出を担当。

内田結花 | ダンサー。ダンスボックスのスタッフ。Mi-Mi-Biの立ち上げから関わり、豊岡公演、神戸公演では演出助手・出演・制作補佐と多角的な役割を務めた。

武内美津子 | 視覚障がいのある表現者。見えない人、見えにくい人と共に視覚を使わないダンスを探索するプログラム『視覚ラボ』に参加。Mi-Mi-Biメンバー。

三田宏美 | 踊る手話通訳士。聴こえる人も聴こえにくい人も、サイレントな劇場を楽しむ『サイレントシアター』に立ち上げから関わる。Mi-Mi-Biメンバー。

田中幸恵 | ダンサー。教育機関などでのアウトリーチにて、全国各地で年間多数ナビゲーターを務める。ダンスボックスのスタッフ。『サイレントシアター』に立ち上げから関わる。

ゲスト：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なっているほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにも関わる。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（九州大学出版会、2018年）、『アートマネジメントと社会包摂』（水曜社、2021年）など。



5年間を振り返る



トーク・ダイジェスト

公共劇場

いろんな人たちがいろんな風に出入り自由に居やすく居られる場所

長津:私は文化政策が専門でして、文化とか芸術っていうものを支える制度をどうやってつくっていくか、それから芸術と社会的な課題のようなことをどういう風につないでいったらいいかということ、実践的に考えるような研究を普段しています。まず今回、この5年間の話を聞いて、取り組みの層の厚さを感じました。ダンスボックスはNPOが運営していて、公立の劇場ではなく、民間の劇場であります。そういうことで言うと、公立劇場じゃないんですけど、ダンスボックスは「公共劇場」だなんて思っただけです。というのも、“公立”と“公共”ってちょっと意味が違うんですね。必ずしも公立劇場が公共劇場であるわけではないんです。じゃあ、“公立”と“公共”の違いは何かと言われると、公共っていうのは「パブリック」「オープン」「コモン」っていう3つの意味があると言われてるんです。「オープン」は開かれたという意味です。「パブリック」は公的な、という意味で、公立劇場はこの「パブリック」の意味に近いです。そして、公共として大切なのは「コモン」です。「コモン」の意味は、いろんな人たちがいろんな風に出入り自由に居やすく居られる場所であるかどうかなんです。2012年に劇場法っていう法律ができて、劇場っていうのは「新しい広場である」と言われるようになり、今で10年経ちました。今日この5年の話を聞いて、本当に、いろんな人たちが出入りしてるんだなと感じました。そして、出入りだけでなく、ここに居座っていたりとか、突きつけたり、時に迷惑をかけたりかけられたりとか。いろんなことがきつとこの5年間で起こっていたのだと。

関わった前と後の変化

難しいことや困難に出会った時、どう乗り越えていくのか

長津: (前半で聞いた) 皆さんのお話の中に、ピフォーアフターがしっかりあるというのが面白かったです。関わった前と後ですごく変化してる。例えば、美津子さんが「相手と指先を合わせるだけで、相手の動きを感じ取る」みたいな話があったんですけど。その美津子さんの感覚って、どうしたら他の人に共有できるんだろうとか。これは見えない人と色んなチャレンジをしていく中で、非常に言語化しづらい感覚ですよ。見える人にとって、その感覚っていうのは、安易に理解することは難しい。そういう非常に私的な感覚が共有されることによって、その場にいる人たちの表現の幅を広げていく足掛かりをたくさんつくっているんだなと。いろんなことをいろんな人と出会ってやってみることによって変化していく。また、森田さんが、「私が演出をする、引っ張っていくっていうことは難しい、私の身体性しか分からない」という風におっしゃっていて、「他の人の身体性をどういう風に引っ張れるんだろうっていうのが分からない」とうかがって、しかも、森田さんはそれが欠点だとおっしゃっていて。あ、そう思ってるんだと、びっくりしました。内田さんのスロープの話では、会場が違うことによってスロープのつけ方が変わってしまうので、それによって演者さん1人1人の身体性が変わってしまう。そのような、現場を1つ1つ積み重ねることで、出会ってしまう難しさみたいなことを、どう乗り越えていっていかっていくプロセスがある。そういうことを5年間やっておられる、変化の過程を伺い知ることができました。今、立ち止まって考えてみると、あの時にいろんなことがあったことで、できなかったことができるようになってるんじゃないか。それって一体何だろうって。



チャレンジできる場所

とにかくトライしてみて、その後に新しい気づきが生まれる場所

長津: チャレンジできる場所にダンスボックスがなってるっていうのが、すごいことだと思ったんですね。例えば、三田さんがサイレントチームでのプログラムを考える上で、「通訳しません」と言った話。すごいこと言ってるなって(笑) きこえないって一括りに言っても、いろんな人がいるんだけど、とにかく一括りにするのはまずいことなんですっていうことを、三田さんのやり方で表現をしておられる。「いや、それは困ります、手話通訳で頼んでるんだから通訳してください」ってダンスボックスから誰も言わなかったっていうのもすごい。チャレンジができる時間、突きつけるような時間があるっていうことはすごいことだなと思いました。「通訳しません」から、新しいトライもはじまって。「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」では、西岡さんをはじめとするナビゲーター側が2人しかいないのに、参加者がどんどん多くなって受け止められないような状態になってきた。けれど、継続して参加している人たちが、気がついたら、それぞれがそれぞれでアシストしてくれるようになっていたっていう。ナビゲーターの方は全てをコントロールしたい人も多いと思いますが、それをある種が諦めない場が成り立たないとなった時に、結果的に、いろんな人たちがいろんな形で居られる場所になってきた。

ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャを地でやっている

長津: 全体に共通してるのは、共生社会、ルビが「ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ」と言うようなタイトルを、地でやっていることです。ここが「公共劇場」になっているからこそ起こっていることだなと。今まではできなかったことも、とにかくトライしてみて、その後に新しい気づきが生まれるっていう場になっている。場に託したり、場を諦めたり、場に突きつけたりみたいな、いろんな人たちがいろんなチャレンジができるような環境になっているのって、このぐちゃぐちゃのゴチャゴチャの状態じゃないと起こらなかったことだと感じたんです。でも、これ大変ですよなって。ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャであることを保つって、めっちゃ大変じゃないですか。

文:

そうですね。これを動かしてくれてる、一緒に走ってくれてる人たちが、1つの正解を追い求めずに常に周りの人の声を聞きながら走ってくれている事が大きいです。誰も自分のエゴだけで動かないというか。うん、これは大きいですね。正解がないことをやっているし、お手本っていうのがすぐ手の届くところがないことをやっていると思っています。なので、それぞれに思考錯誤をすることを楽しんで、大変だけれども楽しんでくれていることが、この状況を生み出しているのかなと。

情報保障

見えない人のための鑑賞ガイド

実施公演: Mi-Mi-Bi『未だ見たことのない美しさ～神戸ver.～』。

開演1時間前に劇場に入り、当日配布されるパンフレットの情報を音読、劇場の形状やステージの広さを誘導者とともに歩く、ダンサーの身体や衣装に触れたり、声を聞くなど、公演を作り出す要素や公演の構成をできるかざり伝えました。今回は視覚障がいのない人も参加可能にしたため、アイマスク着用して参加した人もおられました。参加した人からは、公演に対する視点が変わったという声をいただきました。

字幕

実施公演: 『みんなのフェスティバル』、Mi-Mi-Bi『未だ見たことのない美しさ～神戸ver.～』、『「こんにちは、共生社会」の5年を振り返る～障がいを持つ人との取り組みを中心に～』、他。日本語字幕を投影。

手話通訳

多数のプログラムに手話通訳を導入しました。



ウェブサイト・SNS開設

ウェブサイト

昨年度2つのウェブサイト（こんにちは、共生社会プロジェクト全体について、やさしいコンテンポラリーダンスクラス単独ウェブサイト）を公開し、障がいのある方もない方も、ウェブサイトを見たときに情報が伝わりやすいよう工夫を重ねながら運営しています。またこれまで開催した公演やイベントなどの情報も、開催後に「レポート」として掲載しアーカイブしています。文字サイズや色の変更、日本語の他に4つの言語に自動翻訳に対応しています。



こんにちは、共生社会 ウェブサイト
<https://diversity.db-dancebox.org/>



やさしいコンテンポラリーダンスクラス 単独ウェブサイト
<https://yasacon.wixsite.com/dbkyosei>

Instagram / X

公演やイベントの情報の他、日々の様子などを配信しています。



こんにちは、共生社会 X
[@kyosei_db](https://twitter.com/kyosei_db)



こんにちは、共生社会 Instagram
[@npodancebox_gg](https://www.instagram.com/npodancebox_gg)



やさしいコンテンポラリーダンスクラス Instagram
[@yasacon_dance](https://www.instagram.com/yasacon_dance)

2023年を振り返って

運営メンバーの声

 **コラム**
NPO法人DANCE BOX エグゼクティブ・ディレクター 大谷 燠

今年度は、Mi-Mi-BiのArtTheater dB KOBEでの公演が印象深く残っています。様々な障害のある人、ない人が協働してつくりあげた作品です。2007年頃からいわゆる障害者といわれる人たちと一緒に作品づくりをしてきましたが、私のなかにあったのは一貫して「障害者の」という枠組みから自由になることでした。

障害者、健常者という差別感覚におおきな違和感があります。私たちはいつも隣り合わせで生きているはずなのだと思うのです。そして、喜びと悲しみ、苦悩と快楽、生と死も常に隣り合わせにあります。Mi-Mi-Biの公演からは、そのような身体感覚を呼び起こすものがありました。

 **コラム**
ダンサー、「こんにちは、共生社会」プロジェクト・アシスタント 内田 結花

今年度は、劇場を中心に、長田のまちや、特別支援学校など、色んなところで様々な人が入り混じるなか、ダンスを楽しむ時間に出会うことができました。Mi-Mi-Biは2年目を迎え、カンパニーの拠点である劇場ArtTheater dB KOBEにてリ・クリエーション公演を行いました。会場が変わることで、演出的にも演者の動きにも変更と工夫が余儀なく必要とされ、沢山試し、話し、悩み、メンバーが一丸となって本番まで共に歩めたことが、大きな財産になっています。客席には、障がいのある方もない方も、老若男女、近隣・遠方問わず、国籍問わず、ごちゃ混ぜにご来場いただき、ダンスを観ていただけたことを、今も思い出しては嬉しさを噛み締めています。アフタートークで「応援しています！」と声をかけていただき、温かく受け入れてくださったことも忘れてたくありません。誰しもそれぞれ固有の存在であり、身体性も感覚も、その身体に宿る文化も歴史も異なる。けれど一緒に活動していく中で、理解しようと互いに歩み寄ることが、これからのカンパニー活動やプロジェクト全体、そしてわたし自身をも支えてくれるのではと、希望を抱いています。



 **コラム**
踊る手話通訳士、Mi-Mi-Biメンバー
サイレントプロジェクト・メンバー 三田 宏美

Mi-Mi-Bi豊岡上演作品の神戸再演ではリクリエーションの過程でそれぞれの身体や感覚に向き合い直し、神戸聴覚特別支援学校アウトリーチでは初の複数日開催で児童たちの成長や可能性に触れ、2023年度は重ねることで深まり膨らんだ1年だったように思います。「こんにちは、共生社会」の5年を振り返るトークディスカッションでは久しぶりにサイレントディスカッション（声・手話NG、筆談身振り等のみ）を実施して。戸惑いながらもお互いに視覚を澄ましコミュニケーションを探り深まっていく豊かなカオスの現場がそこにあることそれ自体の重要性や可能性を改めて思いました。これからも広がり発展していくことを願っています。



ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ

こんにちは、共生社会

主催：文化庁、NPO法人DANCE BOX

企画制作：NPO法人DANCE BOX

